



藤本茂樹さん
（「シェル・ソング」の著者）

「強くありなさい」。手錠をかけられた若い男性は、妻と幼子に向かってそう叫び、収容所へと連行された。照りつける太陽、雨ざらしのテント、粗末な食事。やせ細り、孤独に耐えながら、家族の声を求め、収容所で拾い集めた貝殻に耳を当てた。

■地獄谷の強制労働
「強くありなさい」。手錠をかけられた若い男性は、妻と幼子に向かってそう叫び、収容所へと連行された。照りつける太陽、雨ざらしのテント、粗末な食事。やせ細り、孤独に耐えながら、家族の声を求め、収容所で拾い集めた貝殻に耳を当てた。

太平洋戦争中、多くの日系人が強制収容された米ハワイ最大の「ホノウリウリ収容所」を描いた絵本が、米国で関心を集めている。執筆したのは日系4世の絵本作家シャロン・フジモト・ジョンソンさん（53）。小さな貝殻に希望を託し、過酷な環境を生き抜いた祖父の実体験を基にした一冊だ。シャロンさんは「未来の世代に歴史と物語を語り継いでいきたい」と語る。（ロサンゼルス支局 増田知基）

日系人収容 絵本で伝える

祖父集めた貝題材「次代に継ぐ」



1940年代半ばのホノウリウリ収容所（R・H・ロジャース撮影）＝ハワイズプランテーションビレッジ所蔵

絵本への思いを語るシャロンさん（7月22日、米カリフォルニア州ローズビルで）＝増田知基撮影

まとめた。昨年4月、米大手出版社の手で売り出されると、著名な米国の作家らの父親から継いだ。真珠湾攻撃翌年の1942年、29歳の時に「敵性外国人」と

茂樹さんはハワイ生まれの日系2世で、日本の製品を扱う貿易会社を日本出身の父親から継いだ。真珠湾攻撃翌年の1942年、29歳の時に「敵性外国人」と

呼ばれた。強制労働以外の時間に茂樹さんが集めたのが、足元で輝く貝殻だった。ゴツゴツとしたとけのあるもの、線が刻まれたもの、花びらの形をしたもの……。マッチ箱にしまい、貝の種類の名前を紙切れに書いて残した。

45年、家族のもとに戻った茂樹さんは、呼吸器や精神を患っていた。療養しながら静かに過ごし、63年に



シャロンさんが亡き祖父とのつながりを持ったのは10歳の頃。父のエドワードさんから、「おじいちゃん」が収容所で集めたんだよと貝殻を手渡された。大切な物だと直感し、その後も大事に保管し続けた。

祖父ら多くの日系人が強制収容された歴史を伝え聞く中で「いつか祖父の物語を伝えたい」と思うきっかけとなったのが、祖父の妻・菊枝さん（2014年に96歳で死去）が日本語で残した自伝だった。大学生の時に読み、細やかな筆致でつづられた茂樹さんへの思いが胸に響いた。

49歳の若さで亡くなった。■子どもも読める
シャロンさんが亡き祖父とのつながりを持ったのは10歳の頃。父のエドワードさんから、「おじいちゃん」が収容所で集めたんだよと貝殻を手渡された。大切な物だと直感し、その後も大事に保管し続けた。

てたシャロンさんは、40歳の壁に圧倒された。「祖父を機に、祖父の物語を子どもたちも読める絵本で残そう」と決心。理解のある編集者との出会いが出版の後押ししてくれた。

シェル・ソングの筋書きは菊枝さんの話や自伝を基にしている。茂樹さんの貝殻や菊枝さんの着物の質感を表現した絵が、独特の温かみを生み出している。

■戦後80年 現地へ
戦後80年となった昨年、シャロンさんは、跡地を管理する米国立公園局から遺族としてホノウリウリの跡地に招待され、次女のローレンさん（12）と巡った。強